

第 4 章 要 約

第Ⅱ部は、筑波大学生の「運動生活に関する調査」と正課体育の科目選択における動機と運動能力に関する研究の結果を、如何に授業のための支援情報として活用できるかについて検討を加えたものである。

既に、大学体育研究の第1報から第3報において、継続研究として「支援情報」となり得る事項の検討やデータシステムの開発等についての報告がなされてきた。これまでのものは、条件把握や現状分析等が主なものであったが、ここでは、これらの支援情報を広く学生のスポーツ行動全体にわたった形のものとしてとらえ、学生生活と「正課体育」との係わりについて検討を加えた。また、筑波大学では、原則として四年間をとおして、共通科目「体育」（理論を含む）を履修することとされ、他大学とは異なった教育課程となっているので、この教育効果評価の第一段階でもあるといえよう。

本学体育センターが開設している「共通教育（体育）」は、本学の体育専門学群学生を除く学生を対象としているので、受講する学生が全て体育・スポーツに興味や関心を持つ者とは限らず、この報告で「Stay 階層」としている体育やスポーツに消極的な学生をも含めて、授業が展開されている。大学で行なう体育の中で、とりわけ適切な指導を受けることが求められるのは、この Stay 階層と、Area 利用階層や Program 参加階層の学生であるともいえよう。

体育センターでは、教官の共通理解として、これまで、Club 所属階層の学生に対しては、より高いレベルへの挑戦の意欲を持たせること、Program 参加階層や Area 利用階層に属す学生に対しては早く一段上のレベルへの意欲を持たせることをねらいとし、Stay 階層に属す学生に対しては、まず、スポーツへの興味を持たせることやそのための手順を正しく指導することとして授業を展開してきたが、本調査結果にみられるように、その効果は、徐々にではあるが表われてきているといえる。

特に、Stay 階層に属する学生が、第2報の報告例にみられるような、小学校、中学校、高等学校期の体育授業等の中で受けた「マイナス体験」等を、他の階層に属す学生より、より多く持っているにもかかわらず、本学での体育授業に対し「満足度」が高いことは、「運動嫌い」であるはずの学生に対する教育・指導の効果が、学生の内部変容へいくらかでも作用している結果と考えてよいであろう。また、授業を契機として、運動クラブへ加入する学生が存在すること、また、Program 参加階層や Area 利用階層が増加してきていることは、大学における体育のあり方として良い方向の評価としてよいであろう。

反面、学生の受講の動機等にみられる受講態度として、「手軽なもの」、「楽にやれそうなもの」的発想指向があることは、これまでの生活体験の中に「真にスポーツのもつ良さ」を持っていない

ことや「受験勉強」体制の中での生活体験しか持ち得ないとはいえ、今後の指導や授業展開の中で、教官側としてはそれを受け止め、配慮しなければならない問題提起でもある。3年次、4年次学生の体育に対する感想文等にみられる「受験勉強で、身も心もヘトヘトになっていても、大学に入学できたなら、何んでもよい、思いきり身体を動かして汗を流してみたいと思っていたので、運動クラブに入った。」という趣旨の内容が多いことなどや、また、他の階層に比較しArea利用階層、Stay階層に多くみられる「家族のスポーツに対する理解度や関心が低かった」生活体験や小学校、中学校、高等学校期の運動体験が「消極的」であったことなどは、共通体育の指導における重要な問題であると同時に、本学の「体育専門学群の学生」の教育指導内容へフィードバックできる支援情報としても活用することができるものであろう。

筑波大学体育センターでは、スポーツ種目の専門の教官が、その専門のスポーツを教材として指導を行なう授業形態をとっているため、学生にとっては恵まれた条件で指導を受けることができるともいえるが、本調査結果を今後も発展させる方向で活用し、学生に対しては、スポーツの生活化と生涯体育への取り組みの契機とし、また、教官側としては、今後の授業研究や教育のための支援情報として活用することとしたい。とりわけ、Stay階層に対しての取り組みは、今後の大きな課題としなければならないと考えている。